

視線の有効性と標的刺激の情動価が人物の信頼性判断に及ぼす影響

白井 理沙子

関西学院大学大学院文学研究科

小川 洋和

関西学院大学文学部

視線手がかり課題において、人物の視線の有効性は視線の送り手の印象形成に影響を与え、標的位置を予測する視線手がかりを与える人物は信頼性が高いと評価される。また人物の持つ情報が視線を介して標的の印象形成に影響を与えることも報告されてきたが、逆方向の影響である、標的の情報が視線を介して人物の印象形成に影響を与えるかは明らかになっていない。本研究の目的は、視線手がかりによって標的の情動価による人物の信頼性評価への影響がどのように変化するかを明らかにすることであった。実験では視線が移動した後、顔の左または右に標的となる不快画像または快画像が呈示された。参加者は画像の左右位置を判断し、最後のブロックでは加えて顔の信頼性を判断した。その結果、画像位置と一致した方向に視線を移動させる顔は信頼性が高いと判断され、この効果は不快画像より快画像で大きくなった。この結果は、視線手がかりの有効性と標的の情動情報が人物の信頼性判断に影響することを示唆している。

Keywords: gaze cueing, personality judgment, visual attention

問題・目的

人物の視線によって視覚的注意が誘導される視線手がかり効果は、視線の送り手の印象形成にも影響する。例えば、Bayliss & Tipper (2006) は標的位置を予測する視線手がかりを与える人物は、標的位置と不一致な方向に視線を移動させる人物よりも信頼性が高くなることを示した。また、視線の先にある標的の印象も視線手がかりによって影響を受ける。King, Rowe, & Leonards (2011) は信頼性の高い人物の視線によって位置を予測された刺激が信頼性の低い人物によって予測された時よりも好ましいと評価されることを報告している。これは人物の持つ情報が視線を介して標的の印象形成に影響を与えることを示しているが、逆方向の影響である、標的の情報が視線を介して人物の印象形成に影響を与えるかは明らかでない。そこで本研究は視線手がかり課題を用いて、視線手がかりによって標的の情動価による人物の信頼性評価への影響がどのように変化するかを検討した。

実験 1 方法

参加者 参加者は20名（男性3名 女性17名）、平均年齢は20.65歳、年齢範囲は18～28歳であった。

刺激 Chicago Face Database (Ma, Correll, & Wittenbrink, 2015) から顔画像36枚（男性18枚 女性18枚）を使用した。また標的画像は、快画像および不快画像を各18枚IAPS (The International Affective Picture System; Lang, Bradley, & Cuthbert, 2005)、Google画像検索から選出した。

手続き 実験では、顔画像を画面の中央に呈示し、1,500 ms後に顔画像の視線が右と左どちらかに移動した。視線の移動から500 ms後に顔の左または右に標的となる不快画像または快画像が呈示された。参加者の課題は標的画像が左と右のどちらに呈示されているかをキー押しで判断することであった。視線と一致した位置に画像が呈示される条件を視線一致条件、不一致な位置に呈示される条件を視線不一致条件とした。また、視線が移動しない条件として直視条件を設けた。視線の種類（視線一致・視線不一致・直視）×標的の情動価（快・不快）ごとに6枚の顔画像が割り当てられ、それぞれの顔画像と標的画像は実験を通して常にペアとなって呈示された。どの顔がどの条件に割り当てられるかは参加者間でランダムであった。実験は6ブロックからなり、それぞれ36試行ずつ、合計216試行あった。最後の6ブロック目では、画像の位置判断に加え、人物の信頼性判断（1. 最も信頼できない～9. 最も信頼できる）も行った。

実験 1 結果

画像の位置判断までの反応時間の結果、視線一致条件は視線不一致条件よりも反応時間が短く、視線手がかり効果が観察された。また、人物の信頼性評価の結果では、視線一致顔が視線不一致顔・直視顔より信頼性が高いと評価された。さらに、視線一致顔は標的が不快である時より快である時に信頼性が高くなった。一方、視線不一致顔は標的が不快である時より快である時に信頼性が

低くなった (図 1)。直視顔では標的の情動価による信頼性の評定値に違いはなかった。

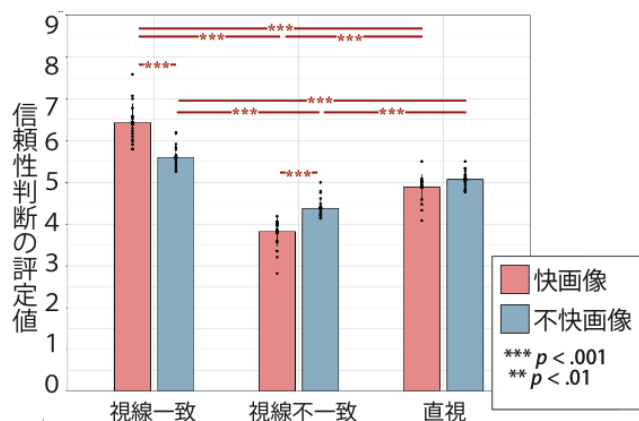


図 1. 人物の信頼性判断の結果を示す。エラーバーは SD を示す。また、個人データをプロットして示す。

実験 2 方法

実験 1 では、視線手がかりの有効性によって標的の情動価が人物の信頼性判断に与える影響が変化することを示した。しかし人物の視線手がかりは、どの位置に標的が呈示されるのかという標的の位置の予測性と、どちらの情動価の出現を予測するのかという標的の情動価の予測性の両方を含んでいた。そのため、標的の位置と標的の情動価の両方の予測性が信頼性評価に影響を与えていたのか、それともどちらか一方の予測性のみが信頼性評価に影響を与えていたのか明らかでない。そこで実験 2 では、標的の情動価を予測しない顔を加え、視線手がかりによる標的の位置の予測性と標的の情動価の予測性を切り分けて人物の信頼性判断に与える影響を検討した。

参加者 参加者は 24 名 (男性 2 名 女性 22 名) であった。平均年齢は 20.75 歳、年齢範囲は 18 ~ 25 歳であった。

刺激 顔画像 48 枚 (男性 24 枚 女性 24 枚)、標的画像 54 枚を用意した (快画像 18 枚、不快画像 18 枚、中性画像 18 枚)。

手続き 実験 2 では標的の情動価を予測しない顔を準備するため、快画像・不快画像が同等の確率で標的として呈示される快/不快混合条件を加えた。視線の種類 (視線一致・視線不一致) × 標的の内容 (快・不快・中性・快/不快混合) ごとに 6 枚の顔画像を割り当てた。実験は 8 ブロックからなり、それぞれ 48 試行ずつ、合計 384 試行であった。参加者の課題は実験 1 と同様であった。

実験 2 結果

画像位置を判断するまでの反応時間の結果、実験 1 と同様に視線手がかり効果が観察された。また人物の信頼性判断の結果、視線一致顔の方が視線不一致顔より信頼性が高いと評価された (図 2)。特に視線一致顔は、標的の位置のみを予測する快/不快混合条件より、標的の情動価も予測する快条件の方が、信頼性が高いと判断された。また視線不一致顔は、快/不快混合条件より不快条件の方が、信頼性が低いと評価された。これは視線による快画像の予測性が高いと信頼性が高く評価され、不快画像の予測性が高いと信頼性が低く評価されることを示している。

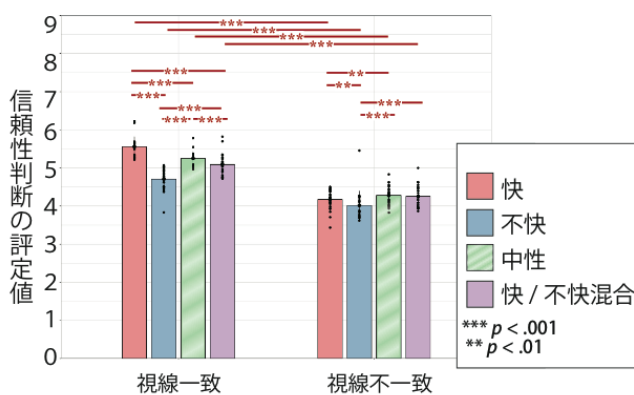


図 2. 人物の信頼性判断の結果を示す。エラーバーは SD を示す。また、個人データをプロットして示す。

総合考察

本実験の目的は、視線手がかりの有効性と標的の情動価が人物の信頼性評価に与える影響を明らかにすることであった。実験の結果、標的の情動価は視線知覚を介して人物の信頼性判断に影響を与えることがわかった。さらに、人物の信頼性評価には視線による標的の位置の予測性だけでなく、標的の情動価の予測性も影響することがわかった。また、これらの結果は視線移動がない場合には観察されなかったため、標的の情動価による人物の信頼性判断への影響には視線を介した人物の意図理解が重要な役割を担っている可能性がある。

引用文献

- Bayliss & Tipper (2006). *Psychonomic Bulletin & Review*, 13(6), 1061-1066.
 Friesen & Kingstone (1998). *Psychonomic Bulletin & Review*, 5(3), 490-495.
 King, Rowe, & Leonards (2011). *Social Cognition*, 29(4), 476-485.
 Lang et al. (2005). Technical Report A-6. University of Florida, Gainesville, FL.
 Ma et al. (2015). *Behavior Research Methods*, 47, 1122-1135.